

広野文芸欄

季題 当季自由句

広野町霜月句会

旅の宿地物のさかな温め酒
甘藷堀る甲乙丙と揃ひけり
どんぐりはどの手に有るや子の手品

遠藤健太郎

山田 基星

手をつなぐ秋の日降つる野道かな
おさげの子自転車押して秋うらら
いわし雲にしめられており二ツ沼

塩 史子

柿の実の右往左往の嵐半ななは
嵐去り庭一面の木の葉散る
病む人の寝息たしかに夜長かな

根本 山水

山彦の音のひろがる秋の空
山よりも海の明るき居待月
秋の月触るゝばかりの水たまり

西山 山子

コスモスに触れ来る風に衣干す
阿武隈の川盛り上ぐる秋の雨
山路行く我身も染めよ紅葉風

鯨岡 一生

椋鳥の天下となれる大樹かな
二年待つ柿の実一つなりにけり
残る虫声もかそけき寺の庭

酒井 津祢

新藁の香りたゞよう畦を行く
がうがうと秋風に鳴るくぬぎ大樹
ねんごろに気づかいくるる秋の冷

宮下 純子

みちのくの水色の空赤とんぼ
白壁の蔵の街並鶏頭花
遠き日の母の想い出秋袷

阿部 真生

山裾の白鷺の宿稻の波
空澄みて秋の気配の今朝の道
鈴虫の音色聞きつゝ夜が更くる

広野みなづき短歌会十一月詠草

(旧仮名使用 五十音順)

台風之余波荒れしづく防波堤に層雲より
照る十六夜の月
暫しの間しづく魚港を窓外に通行止めの
国道逸れゆく

間引きせし大根白菜揉み漬ける亡母夢に
顕ち身めぐりは秋
コース外し走る孫の背に釘付けの吾の目
綿も共にゴールインす
競ふなど念頭になきらし幼孫ニコツと手
を振り走り抜けゆく 山内 洋子

今日もまた事なく過ぎぬ店閉じてひとり
ゆるりと湯舟につかる
冬枯れの道に落葉の散りつもり仰ぐけや
きを過ぐる夕風
白じろと野菊の咲ける道をゆく遠き想ひ
出一ついだきて
空曇り残菊僅かの木々の枝冬へ移行の夕
ぐれさみし 田副 耕一

今宵啼く澄みし虫の音小さくとも聴く吾
が命にしむる思ひす
空澄みて登りし峰の五社の山天女となり
て下界見わたす
頂きの高き峰より眺むればなんと物もの
しき街の景色ぞ 新田 里子

うつうつと気の晴れぬまま酒を飲む健康
を思ふは二の次にして
六十年生き来て人生の味気なさかくも思
ふはわが我ままか
縁ありて短歌の会に入りたり心に微光の
さす思ひせり 藤田 孝夫

妻逝きてすでに十五年朝あさを妻の戒名
に香を手向ける
四季移りめぐる春秋を生きて来ぬ春告鳥
よ我が家に啼け
一人住む吾の誕生日めぐり来ぬ年金証書
あらためて見る 菅原 泰郎

なつかしの一万人コンサート武道館の吾
れ夢の如し
鮭釣りの宿りの客ら鼻歌で朝まだ早きに
足早やに発つ
あじさいの残花一輪伐りて活け客間に秋
の余情を惜しむ 猪狩ユリ子

ダージリンの淡き紅茶を飲みほして届き
し歌稿丹念に見る
朝々を仏壇の前に手を合はすそれより始
まる一日の起ち居
目をとちて心に念ずる思ひをばみ仏は多
分聞きておはさん
めぐりくる祖父母の命日端然と在せし
日々の物言ひを思ふ
子等に遺す何なき吾か長病みせぬ生涯た
るを面伏せて言ふ
平凡に生きて平凡の歌詠みて我をいろど
る何ものもなし
思ひ出を心に秘めて帰る道するどきもず
の声におどろく
雲一つなき秋日和人のなき広場の昼を
ゆつくりめぐる 山口 歌子

